
青空の下に

bluewind

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青空の下に

【Nコード】

N4069C

【作者名】

bluewind

【あらすじ】

広い紺碧の空の中に、輝く太陽一つ、その下に一人。三度、夏が通り過ぎていった。まだ、この暑い空の下に、立ち続けている。（現在停止中）（現在連載中の【金色の花】終了後か、それとももう少し文章表現力が身に付いてから、再度チャレンジ、改めて一から書き直そうかと考えています）

01：一緒に夜の湖に

「ハア……ハア……」

角を曲がって電信柱を……1、2、3、4つ！

タンと両足で着地して、ようやくお兄ちゃんの家に着きました。自分の家を出た時はまだ少し空が明るくて蒼かったのに、今はもうすっかり黒く染まって、砂糖をこぼしたような沢山の星の粒たちが、キラキラと綺麗に輝いています。

両膝に手を置いて、一呼吸、そして額や頬の汗を、手や服の袖ですっかり拭きました。少しでも汗とかが付いていると格好悪いです。そしてようやく息も汗も落ち着いてきて、爪先立ちで背伸び、ピンと伸ばした人差し指で、ちよつと高いチャイムのボタンを押しました。

「お兄ちゃん、来たよ」一緒に扉の向こうに声も掛けました。すると目の前の玄関の薄いガラスの方からすぐに「ああ、ユウ、待てるよ、今、靴、履いてるよ」と声が返ってきました。ユウは家の門のところに背を預けて、ブラブラと片足を上げて揺らしながら、笑みを隠せないといった様子の顔。

やがて、玄関が開くと、お兄ちゃん……と、その後ろから大きな声で「あんまり遅くならないようにね！あと、ユウちゃんを危険なところに連れて行くんじゃないよ！」、とこれはお兄ちゃんのお母さんの声。

「わかってるよ！じゃあ行ってくるよ！」負けずにお兄ちゃんも怒鳴り声で言い返して、ピシャリともう聞こえないよといわんばかりに勢いよく扉を閉めました。

「お待たせ、行こうか」

「ウン」

ユウは肘で背中を押し、飛び出すようにして出発しました。

「ンンンンンンッンンンン」ユウは変な鼻歌を歌いながら、スキップで跳ねて、随分とご機嫌です。さて、少し後ろを振り返ってみれば、お兄ちゃんは口に手を当ててあくびをしたり、首を捻ったり、何だかとても疲れているようです。

「どうしたのお兄ちゃん？」

「ああ、ここところずっと朝と昼が逆転の生活で……」
「で？」

「お前のためだよ……どうしても夜、湖に連れてって欲しいなんていうから」

「変な時間に寝てるお兄ちゃんが悪いんだよ」

「いや、ウン……まあそうだけど。しかし、おまえ、凄くご機嫌なのな」

「え？」

とぼけて不思議そうに、大きな丸い目を大きく開けた顔をしましたが、緩んだ口元の笑みは隠せません。

「だって、本当に凄いいんだよ！」

「フーン、あんまり夜にあの湖に行ったことないからなあ……」

「あたしはお母さんと……ユウスズミ？ に行った時に初めて見たんだけどね、とにかく本当に星でいっぱい凄いの！ 本当に宇宙みたいに！ お兄ちゃん、カメラは持ってきたよね？」

「ああ、使い捨てカメラだけど、コレ使い切っちゃわないといけなから」

「なんだ、あの格好良い大きいカメラじゃないんだ」

「使い捨てだって十分綺麗だよ」

「お兄ちゃんの腕じゃあ、どっちにしたって変わりないか……なんて」

「オイ」

街灯の点々と続く頼りない光を頼りに、暗い夜道を二人で楽しげに話をしながら歩いていると、すぐに湖の前の坂道へとたどり着きました。緩やかな坂を、お兄ちゃんはノソリノソりと、ユウはもど

かしくて先に少し駆け足で登っていきました。やがてユウは坂を上り切ると、「ワッ！　ワッ！　お兄ちゃん、早く！」、ピヨンピヨンと小さく飛び跳ねて、両手を振って呼びました。

「待ってくれ……本当に体がだるいんだよ……昨日の夜からほとんど丸一日寝てないんだから……」と、愚痴をこぼしこぼし、年を召した老人のように背中を曲げて、足を引きずりながらゆっくり歩いていましたが、やがてようやく登りきって、ユウの指差す方を見ると……その光景にすっかり目を奪われ、ポカンと口を間抜けそうに小さく開けました。

「オイ、これは……本当に凄いな」

「でしょ！　でしょ！」

そこにはまさに『宇宙』がありました。

二人は湖の端の少し高くなったところから湖を見下ろしています。田舎の自然の湖なので、辺りには人家は無く、余計な光は一切ありません。そう、天空の無数の星たちを除いて。

湖の向こうには背の低い山があるのですが、暗闇で全く空の闇と溶け込んでいます。空と地上の境が無く、上も下も同じ真っ黒、一色の世界です。そこに、空に浮いている星たちと、その星の光が反射している……湖の表面にも同じ無数の星たちがいて、上も下も星屑だらけ。目の前にあるはずの、山が、ほとりが、黒く姿を消して、ただ星の瞬きだけがそこら中いっぱい、目も眩むほどに沢山見えるばかりなのです。

「すげえ」、お兄ちゃんはまた感想ともいえない言葉を呟くばかりです。

「ねえねえ、ちょっと来てよ。あたし考えたんだ、凄いこと」

ユウはそういうと、湖の水辺の方へと続いている坂を、駆け足で下りていきました。

「ちょっと待て！　俺は監督責任があるんだよ……」、お兄ちゃん

は慌ててユウの後を追って駆け下りました。少し眉根を曲げて困った顔をしながらも、目の前の光景が信じられないといった風で、疲れはもうどこかに飛んでしまったように、目や口はもう柔らかな笑顔です。

02：宇宙を飛ぶ

下まで降りて、ユウはどこに行ったとあちこち目を流すと……ユウが宙に浮いています。

「エッ……」

ユウの頭のずっと上の方に星、ユウの下の足元の方にも……星。星空に囲まれて、空を飛んでいます。

しかし、少しユウの方に近付いたら、すぐに分かりました。ユウは栈橋の上に立っていたのです。木の栈橋は随分と古くてボロボロで、きつと水アカのせいでしょう、表面が黒く変色し、やはりこれも闇に溶けて見えなかったのです。湖の中に突き出た黒い栈橋の先に、ユウが立っていたのです。

「空を飛んでるみたいに見えない？」

そう言ってユウは嬉しそうにはしゃいで、その場でクルクルと回ったり、片足でつま先で立ったり、踊り出しました。右に左にステップを踏めば星々の間を軽やかに飛んで渡り歩くよう……手のひらを上に向けて掲げれば星粒をその手に受けて掴んでいるようです。ユウは決して踊りは上手くなく、時々踏み足を違えてよろめいたり、手の動きが変だったり、でもとても楽しそうに……段々と動きが激しく大胆になっていきました。

ハッと気付きました。そして手で口の前に筒を作って叫ぼうとした時、ユウの姿が黒い宇宙の底に吸い込まれました。ユウがいたのは、真っ暗でよく見えない、水垢で滑る栈橋の上でした。

「ユウ!」、言葉と体は、無意識のうちに動きました。自分まで下手に落ちないようにと、僅かな星の光を頼りに、滑らないようにひと踏みひと踏みしつかり踏みしめながら、栈橋の端までひた走り、そのまま飛び出して『宇宙』の中へと飛び込みました。

黒い空間が激しく歪み、波が大きく立ちました。ブクブクと泡が無数に立ち、どっちが上でどっちが下なのか……方向感覚が全く無

くなる黒い宇宙空間。

ユウの記憶の隅に微かに、腕に、宇宙の冷たさとは違う温かさを
感じたのを覚えているばかりでした。

03：闇から光へ、光から闇へ

真っ暗で、息が苦しい。ここには空気が無い。何も無い。美しい星たちが煌々と優しく瞬いているのに、そこへ行くと何故こんなに苦しいの？

やがて星の光は薄れ消えていき、本当の暗黒。暗闇の何も無い怖さ。そして、闇はまた、白く薄らいでいって、まぶた一つ隔てた先の、光の存在。急に湧き上がってくる心からの安息。

ユウは、ベッドの上で眠っている自分の姿に気付きました。

「気が付いたか？」

誰かの声のした方を向くと、そこにいたのはユウのお父さんとお母さんでした。

「……？」

ユウは不思議そうに首を傾げたら、ズキンと頭が酷く痛みました。何か聞こうと話しかけようとした言葉も引っ込んでしまうほどの痛みです。

「大丈夫か、落ち着きなさい」、お父さんがそつと優しく頭を撫でてくれました。

「意識が戻れば心配は無いでしょう」、両親の後ろに控えていたらしい、背の高い看護婦のお姉さんが厳かに言いました。

「では、何かありましたら、コールを押してご連絡下さい」

「はい、ありがとうございます」

そして看護婦のお姉さんは部屋を……目も痛いほど白い部屋の扉を開けて出て行きました。

「あの看護婦さん、昨日の夜、一日お前を見ていて下さったんだよ。退院する時にはお礼を言わなくちゃね」お母さんはそう言って、何か足元の辺りをガサゴソと探りました。一個の赤いリングを取ったのでした。

「病院？」

ユウはもう聞くまでもないと思いましたが一応、訊ねてみることにしました。

「ああ、覚えているか？ お前が湖で倒れているのを見つけてくれた人がいてな、その人が病院に連れてきてくれたんだよ」

「湖……」

段々と、暗くて曖昧だった記憶が、断片で一つ一つくみ上げられていって、それが一つの積み木の形のように、確かな記憶へと組み上がっていきます。夜、星空、湖、宇宙、水、……。

「（溺れたんだ）」ようやくそこまでの記憶がよみがえりました。棧橋で踊って、浮かれていて、足が急に滑って、何の手応えもなくなつて、冷たい水の中に落ちて……。

「あ、お兄ちゃんだ、お兄ちゃんが助けてくれたんだ」

微かに覚えている、腕に感じた温かさ。あれは右手の手首……。そつと左手で撫でてみました。少し痛みが走りました。布団の中を覗いて、見てみると、そこは赤くなっていました。よっぽど強く握つて、引っ張ってくれたのでしょうか。

「ねえ、お兄ちゃんは？」、ユウは赤い右手を布団から出して、両親に見せました。

「これ見てよ、お兄ちゃん力任せに引っ張ったんだね。こんな赤くなつて……ヒドイよね」、ユウはむしろ冗談のように笑って軽く手を振りました。

しかし……お父さんお母さんの顔が下を向いて……顔色も暗くなりました。

「お兄ちゃんが病院に連れてきてくれたんでしょ？」

何も……言いません。こっちを見ようとさえしません。

「……………」

「ユウ」、お父さんはキツと顔を上げ、真面目な硬い表情でユウを見ました。

ユウも、もう顔から笑みは消えています。お父さんの顔から、決

して誤魔化したりふざけて聞いてはいけないというのがはっきりと伝わりました。お母さんは、顔を伏せて、膝の上で手と手を重ねて撫でています、落ち着かない心をなだめ静めるように。

お父さんの口が、まるで腹話術の人形のように、カクカクと機械のように動いています。そこから発した何かの言葉は、耳が急激に遠くなっていくように、段々はつきりと聞こえなくなっていくきます。最初の一言二言で、お父さんの言おうとしていることが、それで十分に分かりました。もう、聞きたくありません。お兄ちゃんのこととは……もういないのだから。

涙というのがこんなに熱いものなんだと、初めて知りました。言葉も出ないほどの胸の苦しみを、初めて知りました。親しい人を失う気持ちの辛さを、初めて知りました。

腫れた右腕から、全てが現実であることを知らしめるように、絶えず痛みを伝えてきます。初め跡を見た時より、ずっとずっと痛みが増してきているようです。しかし、顔の涙は、決してその痛みによるものではありません。

ふと目の前に影が被りました。小さく華奢な胸が、ユウの顔に当てられました。お母さんの腕の中、ユウは決して目を瞑ることはしませんでした、できませんでした。涙はとめどなく、母の服の裾を湿らしていきました。涙と鼻水で顔が汚れていくことを、何も構いませんでした。

ユウはたまらなくなって、体を全て預けるように、お母さんのお腹にしがみついて、声を立てて泣きました。少しでも周りの病室に声が漏れないようにと、お母さんの服に口を当てて。……………

04：暗黒の水中（セカイ）

夏だというのに、異様に冷たく寒い、黒い虚無の世界。辺りをひと掻きする度に、指先は痺れを感じるように、痛い。こんなに怖く、こんなに寂しい、何も無い世界。だが、この先に必ず、居る。

しゃにむに手を振り回して、その指先に当たる偶然だけを期待する。視界は全く無い。あつちに振るつては、硬い感触、こつちに振るつては、柔らかい感触。それぞれに触れては一喜一憂。栈橋の垂直の足だつたり、これは藻か、水草か。その度に心臓が強く猛り、その度に息が苦しくなっていく。

任せられた以上、必ず助けてやらなければと、母親にこつ酷く叱られると。一念しなければ、気が持たない。

どこに、どこに、この暗闇の一体、どこに。一度、上にあがって息を吸おうか。

そう思い始めた、その瞬間、また微かに指先に感触。こつちか。体を乗り出して、腕を突つ込む。伸ばした指先に当たり、突き指。柔らかくもしっかりと存在感、肌の感触。間違いない。大きく手のひらを開いて、両手で腕をわしづかみ。でも華奢な体、あくまで優しく。

泳げ！ 水面へ！ 急げ！

もう息はろくに持たない。しかしこの暗黒の世界の中、どちらが上なのかまるで分からない。がむしゃらに泳いでいるうちに忘れてしまった。泡が漏れた、斜め上へ昇っていく。こつちが上か。

段々と苦痛が、体中を支配していく。全身に、火炎が渦巻いていくように、熱い。手足が震えて、止まらない。まともに水を掻くことさえ、出来ない。全てを投げ捨てて、無茶苦茶に暴りたい。手を放しそうになるのを、無理矢理、手に力を込めて引っ張る。

あと、少し、あと、少し、あと、少し、水面に、出た、出た、押
せ、押せ、押し出せ、ずっと、上に、押せ、力任せでも、強引でも、
いけ、いけ、乗った、乗った？
乗った、乗った、乗った、……ッ……ッ……。

……

05：回想輪廻

窓の外が、ピカピカ光っているように眩しいです。梅雨は完全に過ぎ去り、もう本格的な真夏の刺すような光です。山の向こうの奥に、巨大な入道雲が隠れるようにひそんでいて、空にはただ太陽が一つ、たくましく力強く輝いています。

車の中に光は一切無く、ただ物憂げにクーラーの音が、沈黙の中に重々しい音色を引きずっています。助手席のお母さんは、時折、前のバックミラーをのぞいてみては、後ろの席に座るユウの様子を窺うのですが、ユウは右の奥の席に、隅に体を埋めるようにして、隠れようとしているようで、はつきりと見えません。

また窓の外に目を向けてみると、前の方から農業トラクターが、ガタゴト騒音を立てながら、ゆっくりとすれ違いました。乗っていたおじいさんは、車の振動で揺れて麦わら帽子が落ちないようにと左手で押さえながら、右手で上手くハンドルを動かして、こちらの車の横を通り過ぎました。過ぎ去ってしまうと、あまりにやかましさには耳がおかしくなったのか、クーラーの音が消えてしまい、怖いくらいの静寂に包まれました。天使が通る、無言の時間。といっても、何か話すのは勿論、ラジオをかけるのも、テープをかけるのも、また窓を開けて風の音を入れるのも、ためらわれました。

「ややあって、運転をしていたお父さんがポツリと眩きました。もう着くよ」

そしてハンドルを一気に切って、静かに湖の入り口のすぐ横の道端に車を止めました。

お父さんはサッとシートベルトを素早く外すと、先に扉を開けて外に出ました。お母さんも出ようとしたら……ユウはまださっき見たときと同じ格好で、隙間に埋もれて固まっています。

「ユウ」

「……………」

「ユウ」

「ん……ウン……………降りる」、抑揚の無い声。

外で、車を回り込んだお父さんが、ユウのドアを開けてあげました。強烈な熱気がまわりつくように迫ってきました。いきなり外の太陽の光をまともに浴びて、肌が、火で焼かれたかと思うようなひりつく熱さを覚えました。ゆっくりと体を回して、熱く焼けたコンクリートの地面に降り立ちました。靴を通して感じるほどの熱さ。

「アッ……………」

ユウの膝が笑い、降りた途端に体勢を崩して、よろめきました。すぐに近くにいたお父さんが肩を抱いてくれたおかげで、倒れずに済みました。

「大丈夫か?」、お父さんはしゃがみ込んで、下からユウの顔を見つめました。

「大丈夫、大丈夫」

ユウは顔を見せないように隠しながら、頷き、手を振りました。そして立ち上がって、一人、先に湖の方へ、湖岸の坂道を下っていききました。

「行こう」、お父さんがお母さんに、促すように肩を押して、そしてユウの後ろに続きました。お母さんも下りていきました。

お父さんとお母さんが小声で話しながら降りてくると、ユウは、栈橋の手前で立ち止まっていました。胸の前で両手の指を交差させて、落ち着き無いように、体が少し震えています。お母さんがユウを抱きしめようと、近付こうとしました。

「怖い」

ユウが、かすれた声で呟きました。

「これ以上、向こうに行きたくない。怖い」

そして、ペタリとその場に座り込んでしまいました。震えが、段々と大きく抑え切れなくなっていく……。

「ユウ、ユウッ」

その小さな頼りない背中を、覆い隠すようにお母さんの温かい体が、全てを包み込むように、抱きしめました。

「ア……ウ……ッ……」

その場にいることは、とても残酷なことでした。目の前の黒い棧橋。考えたくなくても、目の前に、あの夜の自分とお兄ちゃんの姿がある。ふざけて踊っている自分がある。全てを忘れて踊り続ける自分を、今の自分がひっぱたくことは出来ない。落ちていく自分、そこへ飛び込んでいったお兄ちゃん。二つの影の映像が、何度も何度も、棧橋の上に現れては、湖の中へと消えていく。消えていく。

「……ッ」

「……」

「……」

正午を過ぎ、太陽はさらに光を強めていき、湖は蒼さをどんどん濃くしていきます。

滴る汗と涙に、ユウは激しい目眩を起こしました。

06：お兄ちゃんの家へ

ユウは気が付くと、車の後部座席に横になって寝かせられていました。

車は走っているようでした。エンジンとクーラーの騒音。ユウは一度目を瞑って、しかしすぐにまた目を開きました。窓の外は、相変わらずの青空一色。ハケで丁寧に塗り潰されたような一面。窓枠がカンバスのように見え、ボウツと眺めていると、偶然に白い飛行機雲が、一枚絵を分割するように、やや斜めに、下から上へと白い線が引かれていきました。線は、車が進むと共に右へと流れていつて、あたかも幕が引かれているようにも見えました。空の青さが、やや少しずつ黄色みを増してきたのです。

ユウはムクリと体を起こしました。足を下におろして、座席に真っ直ぐに座りました。

「ユウ、起きた？」

お母さんが助手席から振り向きしました。

「熱射病だよ、お茶飲む？」

「ウン……ちようだい」

ユウの喉はカラカラで、口の中が粘ついていました。お母さんは足元に置いてあった水筒を取って、一杯軽く注ぐと、こぼれないように両手で添えて渡しました。

「ありがとう」、ユウは一気に傾けて飲み干し、「もう一杯欲しい」とコップをすぐ返しました。

「ユウ、先に家に帰るからな」、お父さんが、前を向いて運転しながら、ユウに訊ねました。

「どうして？」

湖に行った後は、お兄ちゃんの家へ向う予定でした。

「お前は体、辛いだろう」

「ユウ、一旦家に帰ろうね」、お母さんが合わせて頷きました。

「ウウン、行く」、ユウははっきりとそう言いました。

「ユウ、倒れたんだから、無理は駄目よ。先に帰って横になってなさい」

「ウウン、行きたい」

ユウはただ頑固にそう言っ、プイと窓の方へ目を向けました。空はさつきよりさらに赤みを増して、もう夕方の時間です。車は、村一番の大通りを通っていて、ここでは多少なりの交通量があります。

「ユウ、ずっと眠っていたけど、さつき病院に寄ったのよ。熱射病で、静かに寝ているようにって。だから、帰ろうね」

「だって、あたしが行かないのは、駄目だと思う」

「また今度行くようにすればいいじゃない」

「でも、お母さん、大切なことだから行かなくちゃ駄目って言うたでしょ」

「大丈夫よ、お兄ちゃんのお母さんには、ちゃんと説明しておくわ」
「行く、絶対行くの」

頑とした態度に、お母さんはため息をついて、お父さんの方を見ました。お父さんは片手で頭を掻いて、「分かったよ、じゃあユウも行こう」とししぶしづ頷きました。

07：おばさん

もう陽が全てスッポリ山の向こうに落ちてしまった頃、ユウたちの車はお兄ちゃんの家へと到着しました。もう家の近くの道端に数台の車が止まっていて、降りた皆は少しうつむき加減に口元を押さえたりして、お兄ちゃんの家へと入って行ってます。

ユウらもその車の後ろに並んで停めて、外に出ました。お母さんは、ユウの服に少しシワが出来ていたので、しゃがんで裾を引っ張って正してあげました。そしてお父さんが先頭になって、次にお母さんがユウの肩に手を優しくソツと置くと、ユウは静々とお父さんの後ろに続き、そして最後にお母さんが後ろから見守るように、玄関をくぐりました。

短い廊下を通り、右側の少し大きな部屋に入ると、部屋の中は、壁という壁、白と黒の縞に覆われて異様な雰囲気でした。部屋の真ん中に長く置かれたテーブルに座った人たちは皆、場を埋め尽くすように黒い服を着込んでいて、その雰囲気にはユウは少し怖気づいたのか、オロオロと落ち着き無く辺りを見回しました。自分も両親に言われて、新しく買った黒いワンピースを着せられたのですが、そこにいた皆や、部屋の様子が地味で重々しい格好をしていて、それはこれまで一度も見たことがないお兄ちゃんの家の様子で、まるで違う家に来てしまったかのような変な感じで、落ち着かなくてしょうがありませんでした。

お父さんは、祭壇のすぐ近くのテーブルの前に座っていた、お兄ちゃんの両親の元へ向いました。

「ユウ、行こう」

お母さんに促されて、ユウはとても苦しくて辛かったのですが、心とは逆に足は自然と動くようで、顔は下げたまま、お父さんの横に並びました。

「ああ、ユウちゃん、来てくれたの。ありがとう」

最初に、おばさんが声を掛けたのはユウでした。「ありがとう」

……どうして“ありがとう”なのか、想像できない言葉に、ユウは困って、顔を上げる機会を失ってしまいました。ユウは足元ばかり見つめていましたが、気配と音で、お父さんとお母さんが頭を下げたのが分かりました。

「ユウちゃんは無事で本当によかった。もし何かあったら、あの子を殴りに地獄に行かなきゃならなかったわ。本当に助かってよかった」

ユウは、お父さんとお母さんが、ありがとうございますとうございますと、お母さんは少し涙声で、何度も何度も言っているのを、どこかフワフワした気持ちで聞いていました。両親の音が、ずっと遠くから鳴り響いているように、ぼやけて聞こえます。ユウは段々と落ち着きを無くしていつて、足の甲に足をのせて擦ったり、後ろ手で指を絡めたり……。

突然、目の前におばさんの顔が現れた時は本当にびっくりしました。

「ユウちゃん、おばさんからのお願いなんだけど、あの子のいる湖に、夏に一回でいいから、お花を添えてくれないかな」

ユウはジッとおばさんの目の中を覗きました。その目は少し赤くなっていました。怖くなく、むしろ優しい光を持って、ユウを見つめています。

「ユウちゃんがお花を添えてくれたら、あの子はきっと嬉しいと思うのよ。あの湖にはあの子が……いるんだから」

「……………」

ユウは何も言えなく、ただ頷くだけ、精一杯の気持ちを込めて返事しました。

「ありがとう」

またおばさんはそう言って、そしてお父さんお母さんにもお辞儀しました。

またお母さんに引ッ張られて行って、テーブルにキッチンと正座して座りました。そして、式が始まりました。

08：幼い夏

式は全て滞り無く終りました。

焼香で、礼をして、摘んで入れて、手を合わせて……全てが空々しくて、奇妙でした。もうお兄ちゃんはどこにもいないのに、形ばかり、教えられたとおりに動かして。気付いてみればあつという間にお開きに。

帰りの車の中。ユウの目にはもう涙はありませんでした。不思議と苦しみもありませんでした。ただ、少し胸の辺りに隙間が出来て心が妙に軽いのです。それは勿論、軽やかな心地良さとは正反対です。妙に空疎で空しく、まるでカラッポの宝箱のようです。

小さく付けられたラジオが、静かに時節を伝えていきます。

「もうお盆を過ぎましたが、皆さんは海に遊びに行きましたでしょうか！？ 私はまだなんですよー早く遊びに行きたいー。この頃になると海にはクラゲが沢山出るようになりますので、泳ぐ時は十分気をつけましょうね。昔、フトモモに沢山刺されてひどい目にあっただんですよー」

夏は、まだ続いています。

第二章 09：講習の後

・中学生編

「ユウ、帰ろうよ」

「うん、少しだけ待って」

もう黒板の文字の半分が消されてしまつて、残り半分、書けるだけと急いでペンを走らせて、ノートに書きとめていきます。しかしどうしても追い付かなく、最後の二行はあえなく記し切れず。

「あー……」

「もう、ユウはノートに書くの遅いよ。また後であたしがノートを見せてあげるから、早く行こう！」

「ゴメンね、ヨシコ」

「謝るのも後でいいから早く！」

ユウは机のノートを鞆にしまうと、そのまますぐヨシコに腕を掴まれて、引っ張られるように教室を出ました。

今日は学校の夏期講習の日でした。来年の高校受験を控えて、暑い夏の盛りに、三年生は学校に集まつて、汗を流し流し、講義を受けていました。ユウと、友達のヨシコは、三年生ではじめて同じクラスになったのですが、二人とも一緒の高校を受験するということで、色々お互い聞き合い、勉強し合ううちに仲良くなりました。

「早く行かないと売り切れる！」

今日は町のアイスクリーム屋さんで、新作のアイスが発売される日でした。甘いものに目がないヨシコは、講習が終るのを今か今かと待ちわびて、そして急いでユウを連れて向いました。

外は蒸すように暑く、アイスを食べるのにあつらえむきです。走れば余計に汗をかくのに、ヨシコはまるで気にせず突っ走っていきます。ユウはヨロヨロとついていくしかありませんでした。

しかし残念なことに、アイス屋につくと、もう新作は売り切れてしまっていました。

「あゝあ……だから学校の講習は嫌なんだよね……。町から遠いし、クーラー無いし、教える先生はオヤジばかりだし、話とか面白くないし」

ヨシコはよほどがっかりしてしまったようで、色々と愚痴をこぼし始めました。町の塾に行こうとしていたのを、学校の講習に出ようと言ったのはユウでした。

「ヨシコ、こっちのアイス食べようよ。ホラ、こないだ行った時、売れ切れてたやつだよ」

「うゝん、そうだね。もう何でもいいや……。暑過ぎる……」

二人はアイスを受け取ると、近くの街路樹に設置された、日陰のベンチに座りました。

暫く静かに、蝉の声を聞きながら食べていると、ユウはおもむろに話し始めました。

「ヨシコ、今日の数学の素因数分解、分かった？」

「何であたしに数学のこと聞くわけ」

「だってテスト、あたしより良いし」

「ユウの場合は、書くのが遅くて、回答が時間に合わないって感じだけじゃん」

「それは……確かにそんな感じだけど」

「とにかく数学なんてあたしに聞くのは間違ってるよ」

ヨシコは、最後のアイスのコーンをひと口、放り込んで、手をはたきました。ユウはまだ半分くらい残っていました。

「あ、もしあれだったら先に帰ってもいいよ」

「いいって、ゆっくり待ってあげるから。ていうか早く帰ったらお母さんに、勉強しろ、だもん。むしろ暑くてもここでゆっくりした

い感じ」

「あ、でも、あたしちよつと寄る所があるから」

「……どこに？ 彼氏？」

「ち、違う！……」

ユウが首を激しく振った拍子で、手元のコーンから、アイスがポトリ……と落ちてしまいました。

「あ……ゴメンゴメン」

ヨシコはバツが悪いように真面目に謝りました。以前にもそういう話をした時も、ユウは本気になって、声を荒げて慌てるので、軽い冗談でも言えないなと思うのでした。

ユウは、気にしてないよというように笑みを浮かべて、話を続けました。

「ちよつとね、お墓参りみたいなのをね、行こうと思ってて」

「あ、そうなんだ」

「お花供えに行くんだ。暑いし、ヨシコは早く帰って勉強してたほうがいいよ」

「あの……野暮だったらゴメンね。もしかして、丁目のお兄ち

やんのこと？」

「知ってるの？」

「あたしの兄貴が、同級生なんだ。少しその話、聞いたことあって」

「そう、あたしは小さい頃からお兄ちゃんにお世話になってたんだ」

……そこで会話が途切れました。ヨシコは、それ以上は聞き辛くて、口をつぐんでしまいました。あの事件のことは当時、子供心に興味を持って、兄から色々聞いていました。

暫くしてまた、ユウのほうから話し始めました。

「あの、やっぱり、迷惑じゃなかったら、ヨシコも来てくれないかな？」

「え？ でもあたしが……行っ方がいいの？」

「ウン……やっぱり、一緒に来て欲しいって思ったの。勉強の邪魔したら悪いから、断ってもいいけど」

ヨシコは暫く考えて、そして頷きました。

「分かった、付き合おう」

こつも真面目にお願いされて、断るわけにはいきません。

二人は立ち上がると、花屋を探して歩き出しました。大通り沿いに一軒の小さな花屋があつて、そこで赤い花を二三輪ほど買ってきました。

10：想う者たち

坂を上って、上から湖を一望しました。空には山のような大きい入道雲。今日も湖は、青い空を色濃く映しています。どこまでも底無しのような青。

棧橋の辺りを見ると、そこに誰かがいるのが見えます。その人はしゃがんでお祈りをしているようで、しばらく微動だにせず頭を下げていました。やがて立ち上がり、一度か二度、振り返ったりしてこちらへの坂を上ってきました。

その人はユウたちより何歳も年上のようにでした。薄くても綺麗に化粧した髪の毛の長い女性で、凜とした落ち着いた佇まいの美しい人で、ちようどすれ違う時、ユウたちを見て丁寧に会釈しました。二人もそれに合わせて頭を下げました。

「すごい美人じゃない？ 誰だろう」

女性が行ってしまった、ヨシコがため息混じりに言いました。

「あのお兄ちゃんと同じくらいの歳の人だね、友達かな」

ユウは下げて持っていた花束を、胸元へと持っていました。言い知れぬ恐ろしさを感じ始めました。あの人が……お兄ちゃんの親しい人なのか、好きな人か、あるいはもしかして単に身内だとか。どちらにしても、あの人表情、あの人姿、それらがフラッシュの光のように、ユウの頭の中に何度も光って、意識に深く焼きつきます。

「ユウ、あたしはここで待ってるから」

ヨシコが優しく微笑んで頷きました。ユウも頷き返し、静々と坂を下りていきました。

その様子を、ヨシコはガードレールにもたれて眺めていました。彼女は棧橋の手前で一度頭を下げて、そこで立ち止まりました。し

かし、しばらく迷った様子の後、意を決したようです、その先の棧橋の上へと足をのせました。そして、棧橋の先端で、またお辞儀をして、腰を下ろして花を、湖の中へ流しました。そのまままたお辞儀を……。

「ハヤカワッ」

後ろから声がして、ヨシコは振り返りました。それは、隣のクラスのカカシでした。昨年の二年生の時に、ヨシコとカカシは同じクラスで、お互いウマが合い、よく遊んだり勉強を教え合ったりしていました。

「何してんの？」

「友達の付き合いで……ちょっとね」
そしてユウを見ました。

「ああ、そっぴやここで事故があつたつて」

「あの子の知り合いのお兄さんだつて」

「フウン……」

カカシもガードレールに肘をかけてユウを見つめました。

11：新思案

やがて彼女は全てを終えて、また立ち上がって頭を下げ、こちらに戻ってきました。坂の途中で、タカシの存在に気づいて、少しヨシコに目配せをしながら、彼女の側に立ちました。

「隣のクラスのタカシだよ。あ、そうだ！」

ヨシコはタカシを指して叫びました。

「ユウ、コイツに教えてもらいなよ、数学」

ハ？ と怪訝な顔を浮かべたのはユウとタカシ。

「さっきの話。タカシは数学メチャメチャ得意だから、計算すんごい速いよ」

「ああ……」

「……何？」

タカシがヨシコに伺いを立てました。

「あ……突然ゴメン」、ヨシコは申し訳なさに頭を掻きました。

「あっ……と、とりあえず紹介したほうがいいかな。タカシにはユウのこともう教えたから……、ユウ、コイツはタカシっていつて、去年の二年生の時に同じクラスだったんだけど、数学がチョー凄いの。前のクラスでは『デカルト』って言われてたっけ」

と言って、ヨシコは下品な引きつった笑い声を立てました。

「うわー、そのあだ名を言うな！ やつと忘れかけてたのに」

「実際、目鼻立ち似てんのよね。ピッタリだと思わない？ このエラソーな顔立ち！」

「ほりが深いだけだ！ っていうかデカルトに失礼だろッ」

「なに言ってるのよ、デカルトは実際に偉い人じゃない。アンタは顔ばっかし立派なだけ、ウハッ」

「ていうかあだ名言い出したのも、よく使ったのもお前ばかりなッ。でも何人かが本気にして使われて、迷惑だよ」

「大丈夫だよ、褒め言葉だから、一応。あ……」

そこで、ヨシコは気づきました。ユウが片手にコブシを作って、それを口元に当てている姿に。

「ハッハッハ、こりゃこりゃ凄いわ！」

唐突にヨシコが大声で笑い出しました。

「凄いつて、お前の頭の中が？」

タカシの憎まれ口に、ヨシコは何故か平然とこう答えました。

「ウン」

「夏の暑さでイカレたか……」

「とりあえずさ、三人で図書館に行こうよ。三人で少し勉強しない？」

「ハッ？」

「ねえ、ユウはどう？」

「あ、うん……」

「よし、行こうよ！　ね、タカシは国語苦手でしょ。ユウは国語メチャ得意だから、かわりにユウは数学苦手だから、チョッと一緒に教え合えばちょうど良いじゃん」

「いやまあ……そうかもしれないけど、強引だなオマエ。えっと、

ユウ……さん」

「あ……ハイ」

「脳ミソ蒸発してしまったらしいヨシコさんが、あんなこと言ってますけど……どうします？」

二人の背後でヨシコが何か奇声を発してます。

「ハイ……あたしはよくヨシコと一緒に勉強してますから。それより……」

「俺？　いや構わないけど」

「あ、じゃあ……」

「図書館でやろうよ！」、ヨシコが強引に会話に入り込んで言いました。

「そだね。俺、じゃあ一旦家に帰るよ、教科書とかノート持つてくるから」

「ウン」

「じゃあ図書館で集合って形で、あたしとユウはこのまま行くから」
「ああ」

.....

「歴史面倒臭えゝ死んだ人のことなんかどうでもいいしッ」

「ちょっとタカシ、アンタ馬鹿過ぎ。ユウに教えてもらいな」

「やつばい、チョー計算カンペキ」

「眠い……現国はともかく古文とか役に立つのかなあゝ」

「あつはつはゝ、やつぱ英語はサイコー。もっと勉強してタカシに英語で（悪口）言ってる。理解できてなくて二重に馬鹿。アンタ英語ちゃんと勉強しないと外国人に馬鹿にされるよ、『日本人は英語出来ないくせに横文字好きだ』って」

「あゝ、ちょっと忙しいからユウに聞きなよ」

「お、おッ、オッ！ マジヤバイ……パーフェクト……！」

一人の声だけが、静かな図書館によく響いていました。

.....

「じゃあねゝ」

夕刻、三人は手を振って、図書館の前で別れました。

12：錆びついていた鍵

それ以来、三人はよく集まって勉強するようになりました。大体はヨシコがユウを連れて、タカシを図書館に呼んで、集まっていた。（タカシは学校の講習を取っていませんでした）。

最初の図書館以来ですが、特にユウがとても真剣に、タカシに色々な数学の問題を聞いていました。実際、タカシは人に教えるのがとても上手で、授業中の先生の説明で分からなかったことが、タカシの論理立った説明でたちまち理解出来るのが、ユウには凄く楽しかったのです。

もう夏休みの終わりに近い日、その日ヨシコは都合で来れないということで、二人で集まって図書館に行きました。

「じゃあこの参考書の最後のページに付いてる実力テスト、コレ一緒にやろうよ。で、一緒に答え合わせしようか」

「え……数学だから勝てないよ」

「勝負勝負」

そして時間を見て、同時にテストを始めました。

数十分後。答え合わせ。思わず叫び合った声。

「凄いね、全問正解だね。最終問題なんてあたし全然分かんなかった……」

「コレはラッキーだよ、この前の塾でほとんどソックリの問題解いたんだ。コレ難しいよね」最初は全然分からなかった」

「どうやって解くの？ あたしはこの点とこの点を繋いで……」

「あー惜しいね、ほとんどそれで正解。あとはここを……」

二人は真剣に言い合いました。何しろ、ユウは数日後に、夏期講習の総まとめのテストがあり、この成績如何で、志望校をどうするか等をはかるため、非常に大事な意味を持っているのです。図書館の閉館の放送が鳴るまで、二人は机にかじりついて勉強していました。

た。

結局、最後は司書の人に言われるギリギリまで、集中して勉強していました。特にタカシが、どうしても解けない問題に四苦八苦し、悔しそうに歯ぎしりしてまで必死に解こうとしていたので、放送が鳴ってもユウはジツと待ってあげたのですが、ついに司書さんの「もう閉館しますので……」の一言で、半ば追い出されるようにして外に出ました。

「あゝ分かんなかった。あゝ悔しい……」

「また明日、一緒に参考書とかで調べてみようよ」

「ウン、そうだね。……アッ!」

「どうしたの?」

「あゝ……クソ、あの司書官め」

タカシは鞆の中を覗き、まさぐって、悪態気に舌打ちをしました。
「参考書忘れたゝ、慌てて片付けたからなあ……図書館の本と混ぜて置きっ放しかも」

「今すぐ取りに行けば間に合うと思うよ。あたし、行ってこようか」

「ああ、自分で行ってくるよ。あ、じゃあもうここで分かれようか」

「あ、あの……」

「ん?」

「この近くに美味しいケーキ屋さんがあるんだけど……良かったら

……あの……食べに行かないかなって……思ってた……あの……夏休み中、色々勉強教えてもらったし……その……凄く美味しいんだよその店……その……もし時間があつたら……あの……その……」

「行く行くッ、俺甘いのスゲー好きだからッ、ちょっと待っててッ、すぐ取ってきまーす!」

タカシは妙に浮かれた調子で、即座にそう答えて、凄い勢いで図書館の中へと入っていきました。

ユウは詰まった喉に息をゆっくりと入れていって、震えている膝

に手を当てました。

思い出してみれば、あのお兄ちゃんの死後、それは無意識の内だったのか、小学校の時も、中学に上がってから、男の子と遊ぶことはおろか、クラスメイトと話をすることもあまりありませんでした。口数自体が減ってしまつて、いつも机に座つてノートを開いて勉強しているか、図書館で一人本を読んでいるか、学校ではいつもそんな調子でした。

その中に、ヨシコが入ってきて、少し変わり始めたようでした。彼女はユウに気さくに話しかけてきました。色々面白そうな店を教えては、そこへ連れて行つたり、勿論勉強も一緒にしたり。ヨシコはユウとは違つて……むしろ反対に、沢山の友達がいきました。彼女が部活で、バスケットボール部の部員だったこともあるでしょう。他のクラスにも沢山の知り合いや友達がいて、学年の中でも彼女の存在は少し有名なほどでした。ユウは、その内の一人として、誰にでも仲良くしていたのかもしれませんが、それでもユウに大きな影響を与えました。彼女が普段は口を塞いで飲み込んでいること……お兄ちゃんのことともそうです……好きな本や音楽のこと……思っている気持ちを唯一伝えていた友達でした。ヨシコはどんな話も、まじめに、真つ直ぐこちらを見て聞いてくれました。唯一の、安心して“心の会話”の出来る人だといえました。

それがまた一人、タカシのことも、その内の中に増えるかもしれないと感じました。誘いの言葉は、最初の、入り口の勇気でした。そこからがスタートでした。数年前の夏以来、気持ちが悪く塞ぎ込むうちに、何に対しても引つ込み思案になつてしまつた彼女の、ようやく開きかけた扉でした。

やがてタカシは駆け足で、出口の自動ドアを出てきました。

「タカシくん」

そういえば、この時にユウは初めて彼の名前を呼んだかもしれません。それまでは「あの」とか「ねえ」とか言つて、彼の肩を叩い

て話しかけていました。

「お待たせ」

妙に軽い調子で返事すると、そのまま先頭に立つように一歩前に出て、前に指差し言いました。

「さ、早く行こうか」

「ウン」

といっても店の場所はユウが知っているので、彼女が先に立って歩いていきました。図書館の前の寂しい田舎道を通り過ぎて、左右に広がる畑の道を越すと、車の通りの多い道路に出ました。そこから道沿いに、数分歩いたところにお店はありました。

その間、タカシが取ってきた参考書を両手に開いて、睨むようにまた考えていました。ユウもそれに加わるように、後ろの方から少し遠慮気味に目を向けると、気付いたタカシが彼女に見易いように横にずらしてあげました。

また二人は目の前の問題にのめり込んでしまつて、視線が手元に釘付けに……信号の前で立ち止まつて、その時、横から走ってきたトラックのクラクションの音に、ユウの意識がハッと戻り、気付きました。

「ご……ゴメンナサイ……通り過ぎてた……」

ユウは顔を真っ赤に、俯いて言いました。

13：図書館でいつもの勉強会

やがて夏休みが過ぎ、九月から学校が始まり、再び授業授業の日々。

二人の心は次第に、自然と近くなっていたようでした。それはユウが親しげに、タカシに話しかける様子からして明らかでした。そのきっかけは、ほとんど勉強に関してでしたが、何度も彼のもとに通い詰めていました。放課後になって、彼のクラスの前に行って、出てくるのを待って、声を掛けました。

「タカシくん」

「よ、じゃあ図書館行こうか」

そして学校を出ます。学校にも図書館がありますが、町図書館の方が少し長く開館しているので、いつもそちらで勉強していました。

ユウは、教科書片手に頭を抱えているタカシに、優しく笑みを浮かべて言いました。

「国語が得意になるんだったら、やっぱり本を沢山読むのが一番いいよ。教科書の問題とかのは読み難かったりするから、もっと読みやすい……ライトノベルとか、童話とか、そういうのを読むの。文章を読むことに慣れてくると、教科書の文章でも楽に読めるようになると思うよ」

「童話ね……」

「宮沢賢治とか良いと思うよ。有名だけど『銀河鉄道の夜』とか、読みやすい話だけど、実は結構深かったりするし」

「ああ、確か家の本棚にあったかも……うん、読んでみるよ」

「ウン」

そして彼女は満足そうに目を細めて微笑むのです。

彼女は随分、笑うようになりました。タカシの前では、今も、そ

して学校でも。それは、ヨシコのように大口を開けて豪快に笑うものでは決して無く、表情に薄くかすかに浮かぶほどの儚いものだしが、しかし、そんな優しい綺麗な笑みを、それまでタカシは勿論のこと、クラスメイトや周りの人も、全く見たことありませんでした。その変化が、タカシに嬉しくないはずがありませんでした。

「そっぴいやさッ、アレ読んだッ？ 根下先生の新刊ッ！」

タカシは無類の漫画好きでした。週刊雑誌は出ているもの全てを買っていて、ほとんど毎日、朝必ずお店に寄って買っていき、学校に持って行っていました。今日は雑誌と共に、人気漫画家の根下先生の新刊を買っていたのでした。タカシは嬉しそうに、足元の鞆から、紙袋に包まれた本を取り出しました。もう口は開かれていて、本を出すとユウの前でページを開いて、ペラペラとめくって見せました。

「すっごいよねこの先生、少年誌でここまで描くなんて……グロ過ぎ。コレなんか、もうキャラが人間の原形とどめてないし」

「『タ……タ……カ……シ……ク……ン……マナビタマヘッ、ベンガクシタマヘッ、ウヤマイタマヘッ……』」

「うわッ、びっくりした。それってひょっとして、定義先生の真似？」

定義先生とは、根下先生の漫画に出てくる、主人公のクラスの教師のことでした。

「ウ……ウン……そう……一応……」

「似てた似てた！ アニメの方のマネでしょ！？ 特にお決まりの最後の三つの台詞の吐き捨て加減！ ……けど、定義先生はそんなつまったりしないけどね」

「ウ………恥ずかしくって……」

「でも……実は家で結構練習してたでしょ？」

「ウン……あたし、定義先生の台詞だったらほとんど言えるよ。あたしもこの漫画好きだから。実はアニメは全部録画して、ためてたりするんだ」

「マジで！ 見に行ってもいい！？ 実は先週を見逃しててさ」

「ウン、もちろん。いいよ」

「やったラッキ……レンタルしないで済んだ。ちなみに……今日とか……大丈夫？」

「ウ、ウン。大丈夫、ダイジョウブ」

「やったあ……そうと決まったら、仕上げの勉強、一気にやっちゃおうよ。気になってしかたがね」

そして二人は、タカシの買った英語の問題集の、ページの後ろについていた小テストを、図書館のコピー機でコピーして、一緒に始めました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4069c/>

青空の下に

2010年10月10日21時30分発行